京都の民主運動史を語る会
会　報

2016年1月15日
第222号（隔月刊）

題字　住谷悦治

燎原

燎　原　社
（京都の民主運動史を語る会）
代表　井口和起
事　務　局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302　井手幸喜
〒606-8107
tel & fax075（722）3823

京都の民主運動史 史跡散歩⑮

【連載】

激戦地、京の2530名祀る

沖縄の「京都の塔」（沖縄県宜野湾市・嘉数高台公園）

辺野古への移設が大問題になっている米海兵隊の普天間基地。飛行場を見下ろす嘉数高台公園に立つのが「京都の塔」。一帯は20万人以上が犠牲になった沖縄戦の最初の激戦地だった。自然の要塞の上に堅固な陣地が構築され1945年4月7日から16日間も死闘を繰り広げた。ここで最前線部隊として戦ったのが第62師団。京都出身者が多く含まれていた。

1964年に蜷川知事らによって建てられた碑にはこう書かれている。

「京都出身者の将兵2530名余りの人が、郷土を想いつつこの地で倒れた。又、多くの沖縄住民も運命を共にされたことは、まことに哀惜にたえない。……再び、戦争の悲しみが繰り返されることの無いよう、併せて沖縄と京都を結ぶ文化と友好の絆がますます固められる様、この塔に切なる願いを寄せます」

沖縄には地元の沖縄県を除く46都道府県すべての慰霊塔がある。どの碑文も出身兵士の武勲を称える内容なのに「京都の塔」だけは唯一、住民への哀悼の念と戦争への反省を刻んでいる。

高台の頂上には展望台があり、普天間基地も一望できる。

（那覇バスターミナルからバスで30分、「真栄原」下車）

賀　正

「燎原」編集部

被災と救援の活動の歴史掘り起こしも　新春のごあいさつ　代表　井口　和起　2
細井友晋さんと京都の平和運動　12月例会　高橋伸一さんの報告　3
［新春随想］京都の文化・社会・洛中洛外　岩井　忠熊　5
山宣の東北地方の足跡を訪ねて　語り部　小田切明徳　6
＜私の一期一会＞ 西口克己の「暗い谷間の時代」の二つの青春「弁証法的自己批判」　佐藤　和夫　8
「京大反戦平和詩集」のことども(3)　小畑　哲雄　13
＜この1枚＞ 1961年1月 共産党の赤旗びらき　毎年京都会館第一ホール埋めて　14
〈悼〉山内久君の思い出　7
2月例会の案内／会員消息／情報スクラップ／編集後記　15

【京都の民主運動史を語る会】年会費（会報代とも）3,000円　郵便振込口座　01060-7-15762　加入者名　燎原社

新春のごあいさつ

被災と救援の活動の歴史掘り起こしも

本会代表　井口　和起

明けましておめでとうございます。

昨年は「戦後70年」。マスメディアでもこれまでになくアジア・太平洋戦争の「記憶」が取り上げられました。本誌でも不充分ながら意識的に取りくもうと努めました。私の職場は「資料館」ですから、多くの人びとから戦争体験者たちの遺品・資料等が散逸の危機にある、是非とも対応策を早急に立てて欲しいと切望されました。しかし、到底お応えできる状況になく、心苦しい状況がいまも続いています。

他ならぬ私たちの会が所有している資料も充分に整理・保存できているとは言えません。取り敢えずある学校法人の一室に収納させていただいている現状です。

このような身近な私たちの資料群ばかりでなく、世界遺産だとか国宝だとかと言われる文化財も世界的規模で大きな危機に直面しているようです。

「ブルーシールド」のこと

昨年末、独立行政法人国立文化財機構の文化財防災ネットワーク推進本部が主催し、ユネスコ機関などが共催した「文化遺産防災国際シンポジウム」が京都国立博物館で開かれ、私もパネリストの一人として参加しました。主題はシンポジウムの副題に掲げられていたとおり「文化遺産を大災害からどう守るか：ブルーシールドの可能性」でした。

「ブルーシールド」という言葉はまだ一般にはなじみがないかも知れませんが、戦争や災害から文化財を保護するという運動の「標章」です。戦争や災害から人命を保護するのが「赤十字」ですが、文化財版が「ブルーシールド」（青色と白色の「楯」の標章）です。

第2次世界大戦による文化財の甚大な被害を経験した世界は１９５４年に「武力紛争の際の文化財の保護に関する条約」（１９５４年ハーグ条約）を結びました。その後１９９６年に、戦争に限らず自然災害も含めた大災害から文化遺産を保護するために、文書館・博物館・記念物遺跡・図書館などの関係団体の国際組織がユネスコの下に「国際ブルーシールド委員会」を結成して活動しています。しかし、１９９０年代のいわゆる「冷戦終結」後も西アジア地域をはじめ世界各地での武力紛争やテロによる爆破事件などで、文化財の危機は小さくはなっていません。また、東日本大震災と津波や最近のネパールでの大地震などでも多くの文化財が被災しました。そうした事態に、ハーグ条約を拡大・深化させたハーグ条約第二議定書が１９９９年に採択され、２００６～２００９年にかけて「第二議定書履行のための作業指針」も作成され、活動が本格化しています。

日本がこれらの条約を批准したのは２００７年のことで、東日本大震災の経験をへて、この国内委員会をつくる準備の一環として昨年末のシンポジウムは開催されたものでした。世界の紛争地や被災地の現場で文化財の救済活動を指導・支援してきた経験を持つ英米の代表や大規模な山火事による被災経験をへてブルーシールド国内委員会を組織したオーストラリアの代表の報告もありました。いずれも興味深いものでしたが、それ以上に差し迫った状況下にあると感じさせられたのは京都の現状です。

京都は町中が重要な文化財

ご存じの方も多いと思いますが、京都市内博物館施設連絡協議会（略称「京博連」）が１９９２年に１０１館が参加して結成され、今では２０６館が加盟しています。また、京都にはいわゆる世界遺産や国宝・重要文化財に指定されている神社仏閣などが数多くあります。これらの寺社の多くは昔は郊外の田園地帯に囲まれていました。ところが、今では市街地が急速に拡大し、どこも住宅地に囲まれています。街の多くの小さなしかし宝石のような博物館はもちろん街中にあります。つまり、京都は町中が重要な文化遺産や文化財です。阪神淡路大震災のような大火に見舞われると、これらの文化財・文化遺産はほとんど壊滅的な被害を受ける脅威に直面していると、このシンポジウムでは語られました。

ブルーシールドは指定文化財などの保護に重点を置いていますが、参加者たちの多くは未指定の文化財・文化遺産にも大きな価値があり、保護と防災の方策が講じられねばならないと考えていました。

迂遠なことのようにお感じになるかも知れませんが、私たち京都の民主運動を語り、記録し、記憶として遺していこうとする者も無関心ではいられないと思います。同時に、そうした被災と救援の活動の歴史も民主運動の一環として掘り起こし、語り継がねばならないというのが時代の要請ではないかと感じている新春です。

本年もよろしくお願いします。

（京都府立大学名誉教授）

12月例会

細井友晋さんと京都の平和運動

高橋伸一さん（佛教大学教授、元京都宗教者平和協議会事務局長）の報告

「京都の民主運動史を語る会」の12月例会は12月5日午後、京都市職員会館かもがわで開かれ、佛教大学教授の高橋伸一さんから「細井友晋さんと京都の平和運動」について語っていただきました。

報告する高橋伸一さん（撮影＝矢吹正夫）

細井先生との出会い

今日は、「細井友晋さんと京都の平和運動」というタイトルでお話しをさせていただきます。

私は京都宗平協の事務局員の時代、1970年代前半ですが、まだ学生でございました。ご縁があって細井先生のご自坊、北野の本山立本寺を訪問させていただき、学生の仲間数人でわいわいやっておりましたら、奥から先生が着物姿で出てこられ、「元気がいいですね」と、そのまま話の輪に入って来られました。私は佛教大学の学生ではありましたが、とくに寺院やお坊さんの世界にはそれほど関心もなく過ごしておりましたので、同じ目線といいますか、こちらのおぼつかない考えに、ちゃんと耳を傾けていただき、不十分な知識しか持ち合わせていない私たち学生に寄り添っていただいたことに驚き、感動し、気が付いたら細井先生と宗平協の世界に関わらせていただくようになっていました。

今日は、細井さん（細井友晋1906～1990年）とお呼びします。先ほど、少し触れましたが、学生時代に60歳代半ばの細井先生との出会いがあり、私の中では、今でも文字通り「先生」なのですが、亡くなって25年が経過しましたし、先生を直接知る人はどんどん少なくなっています。そして、戦後70年という大きな時代の節目、今後も日本が平和憲法を守り、戦争に加担することなどあってはなりません。そのために、細井さんに代表される宗教者の平和活動、その足跡を皆さんと振り返る、その材料を私なりに提供させていただければ幸いです。

この7月、本会の定期総会で京都宗平協理事長の宮城泰年先生が「京都の宗教者の今昔」と題して、記念講演をなさいました。その講演録が『燎原』220号に掲載されております。この宮城先生の講演に、仏教の平和運動では、清水寺の大西良慶老師、立本寺の細井友晋師、養福寺の五十嵐隆明師、だん王法林寺の信ヶ原良文師、清水寺の福岡精道師などなど、大変懐かしいお名前が出てまいります。もちろん、こうした方々以外にも、市川白弦師や道端良秀師など高名な学者、宗教者の方が京都で活躍なさっているのですが、その中でも、細井友晋さんは特別だったのではないかと思います。

佛教大学の大谷栄一さん（宗教社会学）、最近、京都の宗教者平和運動を丹念に分析されていますが、大谷さんは、細井さんの活動をみれば京都の宗教者の平和運動の特色がわかってくるといわれております。宮城先生も戦後の仏教者の行動では、「まず、日蓮宗立本寺の貫主であった細井友晋さんを挙げておかなければならない」と述べておられるので、これはあるていど共通した理解と申し上げてもよいと思います。

戦争協力への深い反省から

細井さんの青年時代について詳しいことはわからないのですが、1906（明治39）年に現在の名古屋市に生まれ、14歳日蓮宗寺院で得度、東京の立正大学に進学しますが、専攻は英文学で将来は文筆業をお考えだったようです。事情で愛知にもどられ名古屋市内の妙伝寺住職に就任、細井さん28歳（昭和12）の時ですが、時代は日中戦争が始まり、軍国主義、国家主義に染まっていました。

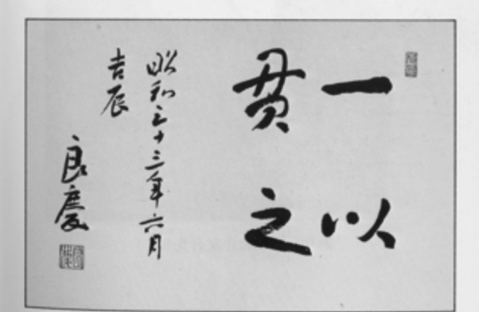
細井さんは、そのころを振り返って次のように述べています。

「昭和20年に至るまでの私は、宗教青年運動などを主としてやっていて、もちろん宗教的な人生観や世界観を持っていたが、当時はやはり同じ日蓮の信仰にたっていたある国粋主義の団体に関係したりしていたので、その人生観や世界観はたぶんに国家主義的な

ものであった。それは、そういう国家主義を日蓮の教義が支配しているというのではなく、むしろ逆に宗教が国家主義に強く左右されるよう傾向を持っていた。」（細井友晋先生追悼集『そのねがい　わが心に生きて』機関紙共同出版　１９９１年　20ｐ）

細井さんは、戦後の１９５１（昭和26）年４月に愛知から京都の立本寺に晋山されます。年齢では40代に入ったところ、ずいぶんと若い貫主さんだったようです。京都に活動の場を移されると、宗教人懇談会（１９５０年５月結成）の事務局長、京都仏教徒会議（１９５４年５月結成）の発起人、京都宗教者平和協議会（１９６１年４月結成）の事務局長（のちに理事長）、日本宗教者平和協議会（１９６２年６月結成）への参加（後に代表委員）、と宗教者の新しい活動、平和活動を実に精力的に実践しますが、この背景に、仏教界・教団の戦争への協力への強い反省、そして仏教界の改革があったわけです。ただ、細井さんの活動は、仏教界、宗教界に留まることなく、多くの市民運動への繋がりを重視し行動されたことは、注目すべきだと考えます。細井さんは、１９５０年のストックホルム・アッピール署名運動に参加、１９５５年の第一回原水爆禁止世界大会、京都代表団の団長として参加。その後、日本原水協を代表する役員として、原水爆禁止運動の発展に一貫して活躍されました。国際的な反核・平和運動には常にその先頭に細井さんの姿がありました。

細井友晋師はよく大西良慶清水寺貫主を訪ねた

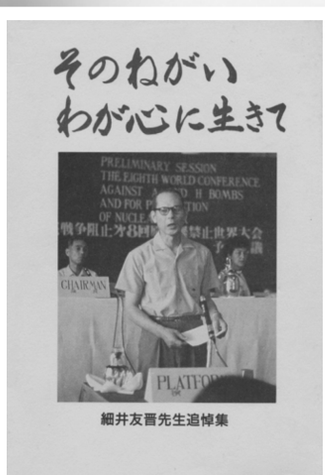

大西良慶貫主より細井友晋師に贈られた書（1958年6月）

若い宗教学生が集う

京都は、全国的にみてもかなり結集力の強い活動を展開してきたと思いますが、その要因は、仏教、キリスト教、大本教、天理教、金光教など宗派、宗教を異にする人が集った、組織の多様性を挙げておくべきだと思います。同時に、その多様性は開放的といいますか、年齢や社会的な地位にこだわることがなく、上下の関係を活動に持ち込まない、そうした価値観を細井さん、福岡さんは常に意識して実践していた、今風に言えば、ファシリテーターのお手本でした。会議では、先走らない、失敗を恐れない、断定しない、「共にある」ことを尊重する。だからでしょうか、宗平協には龍谷大学、佛教大学、大谷大学、同志社大学、などの宗教系大学や一般大学の学生、院生が数多く参加していました。

京都には多くの大学・短大があり、歴史都市であると同時に大学のまちでもありますので、平和運動に若い人が集う条件があったのは確かですが、それだけではなかったのではないでしょうか。京都宗平協の魅力と行動力は、この若い宗教学生の存在が大きいと言えます。

宗平協と活動の目的は少し違っていましたが、互いに密接な関係にあったのが京都仏教徒会議という団体です。仏教徒会議の結成25周年記念誌を拝見すると、宗派を問わない自由仏教人の集まりが宗教人懇談会で、宗教人懇談会が世話役となって京都仏教徒会議が発足する、そこではそれぞれが属する宗派を意識することを排除していこう、「管長クラスの人であろうと、大学の教授であろうと、お寺の和尚さんであろうと、また大学生であっても、坐る席なんかまったく問題にしない。上座も下座も無視です。先にきた人が、適当に坐るというふうにね。」（前掲書　座談会における信ケ原良文理事長の談話）、こうしてみると、京都の宗教者の活動には、市民運動の原則がちゃんと根付いていたのだと思います。



細井友晋先生追悼集

「そのねがい　わが心に生きて」

細井さんは、１９９０年12月３日に逝かれました。84歳でした。追悼集を京都原水協の西沢昭三さんと私が中心になって編集させていただきました。本のあとがきに次のように書いております。「追悼集の編集をするにあたり、先生の偉業を偲ぶだけではなく、細井先生の平和への情熱を、京都の平和運動の歴史の中に位置づけ、明日への展望とする。そうした意図から、皆さんの原稿の一部を、先生のあゆみの『証言』として掲載させていただきました。」以来、25年が経過しましたが、今でも、私の気持ちは同じです。

追悼集の題字は、清水寺の森清範貫主に書いていただきました。細井さんの傍輩と申しますか、同志のお一人、福岡精道さん（清水寺勧学局長、細井さんのあと、京都宗平協理事長を継いでいただいた）の強い想いだったと記

新◉春◉随◉想

京都の文化・社会・洛中洛外

岩井 忠熊

私のルーツは山形県米沢市だ。先祖代々の墓は同市東源寺にある。京都と米沢は遠くはなれているが、今は新幹線を乗り継げば明るいうちに米沢に着くことができる。参議院議員京都地方区で立候補を伝えられている大河原弁護士が米沢出身ときいておどろいた。実は39年も勤めた立命館大学にも米沢出身の船山信一、山口達夫先生という大先輩がおられた。私の知る限り両先輩も京都での研究教育に強い満足感をもっておられた。船山先生は唯物論研究会事件で実刑判決を受け、出獄後に仙台の漁業組合等に就職して発表のあてのない孤独な研究をされた人だった。立命館大学の教職を本当に楽しんでおられた。

最近の国際日文研の井上章一氏が『京都ぎらい』（朝日新書）を著し、話題になっているようだ。井上氏は要件で故杉本秀太郎氏に会った際に出身を問われて、「嵯峨」と答えたところ「あのあたりにいるお百姓さんが、うちへよう肥をくみにきてくれたんや」といわれ、以来みずからを差別された「洛外人」として自覚してきたというのである。ちなみに日本史学ではお土居の内外で洛中・洛外を区画し、18世紀後半に洛中とは東は縄手、西は千本、北は鞍馬口、南は九条までをさしていったという。いま京名所といえばすぐ頭にうかぶ清水寺・祇園・金閣・銀閣そして嵯峨・嵐山も洛中には入らないのだ。洛中とは最近に「田の字型」とよばれる京都の中心部だけの名称ということになる。

そういう話をきくと70年ちかく京都に住んだ私もペシャンコになってしまう。ルーツは遠い蝦夷だし、大学生以来の居住地は左京・伏見・右京といずれも洛外だった。たまに東京へ出ると「京都人」の面をして、東京のソバの汁がやたら塩っからいのに舌打ちし、東京の味よりも京都の味が数倍いいなどとうそぶいてきたのである。

私はいまＪＲ湖西線雄琴の老人ホームで暮らしている。京都地下鉄乗り換えの山科までなら乗車17分、京都までいっても21分にすぎぬ。私の自称京都人気分もさっぱり動揺しない。それでも驚くのは京都駅で出会う外国人の数である。時には私がまるで外国人集団の中の少数者であるような感じに陥ることがある。小・中校期に旧大連育ちのため私にはアジア系外国人の出身国が一目で分かる嫌らしい特技がある。植民地支配民族の差別意識の残存と指弾されれば一言もない。然しいまの私は京都を訪ねてくれた外国人に少しでも親切に応対したいという気分が本音だと理解してほしい。

かつて日本人の海外旅行といえば、旅行社の添乗員が自社マーク入りの小旗をかざして一行の先頭に立つ姿が有名だった。いま京都駅頭で見ると、旗を持ったその添乗員が白人やアジア人なのが普通である。外国人たちは京都に来て何を感じ何に反発しただろうか。そこで洛中居住者の洛外居住者への差別の、外国人に対する屈折した投影などが本当に存在する余地をもっているのだろうか。

昨年国立博物館で「琳派」の特別展示があり、一覧して日本のルネサンスを思わずにおれなかった。光悦村は洛北鷹峯にあることを想い出した。近代の京都は学術・文化の都市といわれる。「滝川事件」で抗議辞職した7人の教授はみな他地方の出身であり、歴代のノーベル賞受賞者もおなじく他地方出身だった。河上肇・西田幾多郎も然り、近代京都の学術・文化の達成が、かつての町衆につづく住民たちが他地方人による営為を助け育てたからあり得たのではないか。京都近代の社会運動の歴史にもその傾向を見出すことができる。

（本会名誉代表・立命館大学名誉教授）

憶しています。

最後になりますが、細井友晋さんの決意といいますか、命を尊び、平和をまもりぬくこころの原点はどこにあったのか、そして、最後までなし通す力の土台はなんだったのか、ますます平和憲法を軽んじる勢力が大きくなっている今の日本を憂うとき、細井さんの歩みを考える意義は深いと信じます。

その解答ではありませんが、細井さんの人となりの一端を、ご息女のことばでご紹介させていただきます。

「自分の病状について最後まで一言も聞こうとはしなかった。病院のベッドで『人間はこうして死んでいくんだろうなあ』と独り言のように妻に語った。人をけっして謗るようなことはしなかったが、かといって褒めることも少なかった。まして煽てるというようなことは一切なかった。お洒落は好きだったが、言葉を飾ることは好まなかった。」（細井未央子「父のこと」より抜粋、『そのねがい　わが心に生きて』）

資料：大谷栄一「１９５０年代の京都における宗教者平和運動の展開」（佛教大学社会学部論集 第54号、２０１２年３月）、大谷栄一・渡邉秀司編『細井友晋資料目録』（２０１１年９月）、京都仏教徒会議『京都仏教徒会議25年の歩み―戦後京都の社会と仏教』（１９７８年３月）

山宣の東北地方の足跡を訪ねて

語り部＝小田切明徳（同志社山宣会）

労農党解散後の全国遊説88年前のコースをたどる

雪のニュースが舞い込んだ頃、水戸、福島県いわき市、同県郡山に出かけました。

東北の地への思いは、まず3・11の復興の取り組みがどうすすんでいるか、地域の先人の英雄アテルイの生きた地のその思いが息づいているか、等の思いをいだいて向かいました。この旅の行程つくり、切符・宿の手配は大阪山宣会の事務局長浜田紀男さんにお願いしました。

さあ出発、神戸空港からでした。山宣は88年前の1928年、3・15事件の犠牲者救援活動と新党結成の全国遊説活動に出かけた。私たちも山宣のコースをたどることにした。

1　水戸市

山宣は陸路国鉄（現JR）で水戸に向かったのであるが神戸空港から1時間余で茨城空港、そこからリムジンバスで水戸へ。水戸の講演会場は国際交流センター。迎えてくださったのは岩清水理さんと彼の仲間でした。千波湖に面した水戸市国際交流センターが会場でした。水戸と言えば水戸黄門さま、偕楽園が頭に浮かびます。日本三大公園ということで、以前この地を訪れたのに中のことはすっかり忘れています。兼六園や岡山の後楽園は近いのでしばしばでかけていますが……。その水戸交流センターは水戸駅の近くでした。

さて、山宣の啓発活動、労農党の解散を受けて新党準備の全国遊説計画に基づき三隊が作られたが、山宣は第一隊で、上村進とであって、福島から北海道方面であった。これらの演説会もすんなり進んだわけではない。例えば秋田では土崎劇場の使用に鯉沼知事からの干渉がなされ、山宣は知事を訪れ反省を促す行動をとるなど前途多難であった。3・15事件の後でありその厳しい情勢を反映してのことであった。

講演会の次第は、地元を代表されてのあいさつの後浜田紀夫さんが話され、のちに私のほうから山宣の実像をまず紹介して、最後に壮絶なラスト、そして、山宣の揮毫「唯生唯戦」の紹介、宇治の山宣の墓の碑文・大山郁夫書「山宣ひとり孤塁をまもる」と母タネの好んだ色紙「好むと好まざるとも、やがては来るその日のために」、山宣の楽天性と歴史の必然性というか、まだ山宣の目指した世の中になっていませんが…。最後に長女治子さんの歌集『清明の季』と東京にご存命の次女井出美代さんの詩を紹介しました。以下、他の会場の講演もこのパターンでさせて頂きました。

2　福島県いわき市

いわき市にはJRに乗る。

ここでは吞川退治さんにお世話になりました。酒飲みの私です。はじめ、私は谷川さんと思いきや、私の大好きな吞川さんでした。会場は生涯学習プラザ。地元の治安維持法国家賠償同盟いわき支部長の渡辺さんの案内チラシでは「湯本さはこ座に山本宣治がいわきで演説したのは1928年の11月27日でした。磐城・入山2大炭礦争議の余熱がまださめやらぬときです」、山宣の演説会は二重三重に警官に取り囲まれ釘付けされ入場不可能な会場を打ち破り炭坑夫諸君と万歳をさけんだ暗黒時代、湯本の蕎麦屋さんで夜遅くまで組織について語り合った山宣、語り合ったのは地元の炭坑出身の山代吉宗らの同志たちだった．宿になったのは湯本温泉の老舗旅館。

3　福島県郡山市

郡山市と聞くと我々は大和郡山の金魚を思い出してしまう。福島県の郡山は東北の玄関口ときく。ここでは景山好和さんのお世話になる。宿は滝本屋、老舗の旅館だ。山宣も泊まったのではないかと思い、古い宿帳をとってありますか?と聞いてみたが、急なことでわからない。当日用意された資料に28年の福島県の山宣が来たことを報ずる切り抜きがあった。「片っ端から中止、準備会時局演説」の見出しでは、湯本座に於いて開催された「時局批判演説会には本部からは代議士山本宣治氏が来演したが、聴衆三百余名出演弁士は例によっていずれも中止と報道がなされていた。（「福島毎日新聞」旧労農党幹部来郡）

4　終わりに

東北の被災地のことは頭にあり気になっていました。山宣に誘われての旅で実現しました。行く前は我が家での準備中に、息子からマスク、ゴーグル着用を言われ、持参しましたが、電車の中で誰もしていませんので、着用しませんでした。

どんなことをお話ししたかですが、次の内容でした。

・語りの前にテープ（CD）　ケイ・シュガーの「山宣」「多喜二」の歌を聞くところで、山宣ってどんな人とは

じめた。
・身長5尺6寸4分、体重15貫500匁（東大の動物科1年、大正7年5月）
映画『武器なき斗い』の下元勉像は老け過ぎていた（40歳未満の青年政治家）
・性格は冗句をいう、気さくな人と始めて、ここで、中略。山宣は多くの人が知っているので、もし詳しく知りたい人は私が書いた『山宣譚』（つむぎ出版。この年末でこの出版社はなくなった）を読んで下さい」と言って、壮絶な最後とその前の半年間の宣治さんの奮闘ぶりを紹介しました。
・山宣の揮毫「唯生唯戦」（南州への思い入れ）
・母タネの好んだ色紙「好むと好まざるとも、やがては来るその日のために」
・大山郁夫「山宣ひとり孤塁を守る、だが私は淋しくない、背後には大衆が支持しているから」
＊孤塁ではない、赤旗だという主張や宣治のお棺を赤旗で家に送ってくれと言ったが、これは労農党の赤旗であった。これらは「贔屓の引き倒し」というもの。
私は、同志社中学校の理科教師として、生徒たちとともに32年間性教育や科学教育を楽しく学んできました。もう十数年も前のことです。山宣を知って力が抜け、生きるための役に立つ学びを追求できるようになった気がします。
最後は長女、次女の短歌の紹介でまとめました。
・死してなお滅びぬ人の志　雄々しかりしを今にしておもう
・烈風にあへてかかげし大き旗　父のなま身はひきちぎれたり
この二つの歌は山宣長女の山本治子『清明の季』より。
・集まりし老いの人の目の輝きよ　若きかの日のよみかえりしか
次女　井出美代（東京在住・92歳）

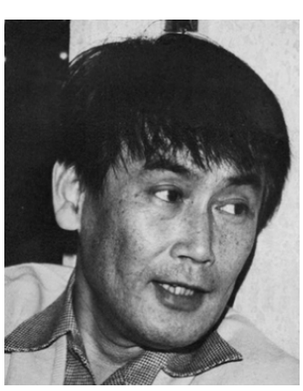
山宣が演説した、いわき市常磐湯本町の三函座（昔はさはこざ、そして、みはこざと呼ばれるようになりました）。明治30年に芝居小屋として作られ大正7年からは映画館として　昭和57年まで営業していた所です。国の登録有形文化財に指定されている。

悼

山内久君（脚本家）の思い出

神代　修
（東京外大の同期生）

山内久君の訃報を『燎原』で知り一筆したためた次第です。
同君は、東京外事専門学校（東京外国語大学）の同期生で、彼は昭和19年フランス語科に入学し、昭和23年同校を卒業しました。
山内君の父は山野一郎（山内幸一）で、無声映画時代に活弁（活動弁士）として徳川夢声らとともに浅草を中心に活躍していました。



また兄の山内明さんは早稲田大学在学中、映画「海軍」の主役に抜擢され、同大学を卒業後俳優になりました。「海軍」は、真珠湾攻撃のさい特殊潜航艇に乗り込み、戦死した海軍将校の物語を映画化したものです。原作は新聞小説で、作者は岩田豊雄（獅子文六）でした。
山内君は、父や兄の影響で脚本家になったのだろうと思います。同期生には映画界やジャーナリズムを志望した者が多くいました。名古屋高裁長官・最高裁判事を父に持つ下飯坂菊馬君（ロシア語科）も、脚本家として山内君と同じ道を歩みました。同君の姓名は本名で、ペンネームではありません。また東宝の専務を父に持つ森伊千雄君（ロシア語科）はＴＢＳのディレクターになり、女優の津島恵子さんと結婚して、話題と羨望の的になりました。ジャーナリズムに進んだのはフランス語科の水上健也君（読売新聞社取締役会長）、中国語科の紺野純一君（『赤旗』編集局長）、筆者（朝日新聞社）らでした。紺野君と同じ中国語科の伊藤敬一君は、東大教授になり、日中友好協会会長を務めていました。

父（活弁）兄（俳優）の影響受け

私たちは戦中・戦後派で、戦争中は軍国少年とは言わないまでも、体制には従順でした。軍事教練に遅刻したり欠席したりすることはあっても、それに反対の意思表示をすることはできませんでした。
しかし敗戦とともに上述の諸君はニュアンスの差はあれ、民主運動にかかわる仕事についてきました。山内君はその典型と言えるかもしれません。

（かみしろ・おさむ　同志社大学名誉教授）

私の一期一会

「暗い谷間の時代」の二つの青春
西口克己の「弁証法的自己批判」

佐藤和夫
（本会世話人）

はじめに

２０１６年は自伝的小説『廓』（１９５６年発表）の作者・西口克己没後30周年の年にあたる。１９８６年3月15日に京都府会議員の3期目での現職死だったが、赤旗日曜版に『戦争狂想曲』を１９８４年11月から50回予定で連載し、39回（１９８５年8月11日号）で絶筆となったプロの作家でもあった。（この作品は西口にとって、「昭和三部作」となると生前私に語っていた。）

政治家としての西口克己は、１９５９年4月以降、伏見区選出のはじめての日本共産党京都市会議員として4期つとめ、１９７５年に府会に転じ3期目の途中だった。府議（定数6）二人・市議（定数11）四人の伏見区に於ける党地方議員団の到達点を切り開く先頭に立ってきた西口の棺は、真っ赤な党旗に包まれて「戦闘的無神論者」として葬られた。

西口の死んだ翌年・１９８７年3月15日を期し、西口克己追悼集刊行委員会の手で『西口克己―廓と革命と文学と』がかもがわ出版から上梓された。

その追悼集で旧制三高と東京帝大の同窓生でもあった親友北條元一氏（元東京工業大学教授・ドイツ文学）は、次のように西口を回想していた。「（旧制三高―引用者補注）文芸部の一年下の理事である作家の青山光二君（三高の哲学教授・土井虎賀寿をモデルにした『われらが風狂の師』の著者―引用者補注）が、あのような詩人が戦後大衆的な小説家になると思いもよらなかったと書いているように、われわれは西田哲学やドストイエフスキーの心酔者だったのだ。ともに東大に進むや、滝川事件その他のファシズム進行の波に洗われ、我々は二人とも急速にマルクシズムの方へと近づいていったのだった。しかし、ともに終戦の喜びを分かちあう間もなく、君が共産党の常任活動家となったのは本当に意外だった。かつての青白いインテリが、かくもたくましい革命家になろうとは。」

また、同じ追悼集で伊藤晃氏（自治体問題研究家・立命館大学講師当時）も、「しかし、一九三九年頃から一九四四年頃までの数年間については、語るべきことや、それを実証する資料が殆んど見あたらない。空白の部分である。多分、凶暴極まりない天皇制ファシズムの嵐が全国土を襲っていたとき、労働科学研究所で、自らの生命の維持（徴兵忌避のため自ら多飲、黄だんになるなどの技術?も含めて）と戦争に協力しないことだけにつとめていたようである」と「コミュニスト西口克己の思想形成―四冊の『哲学ノート』にみる」に書いている。

「女郎屋の息子」と飛び級進学

では、西口克己は〝いかにして革命家・西口克己となりしか〟である。西口克己の自筆略年譜を参考に足跡をたどってみる。

１９１３（大正2）年、4月6日、京都伏見中書島の娼家で父広吉、母ステの長男として生まれる。（一部略）１９２５（大正14）年12歳。小学校5年修了、旧京都一中へ入学。１９２９（昭和4）年、16歳。中学4年修了、第三高等学校・文乙に入学。女郎屋の息子という劣等感をバネとし小中学校を通じた二回の「飛び級」での進学という優越感との複合は、西口克己の自我形成の核になったことは想像に難くない。また、西口自らが哲学や文芸書の乱読で思想的には〝小市民的自由主義〟だったと記述している。以下、略年譜をそのまま記述する―

１９３０（昭和5）年17歳。軍事教練反対の三高ストライキに参加。なんとか処分をまぬがれ北條らと文芸部再建。散文詩を発表。一年後輩に田宮虎彦、青山光二。

１９３２（昭和7）年19歳。東京大学文学部哲学科入学。永井潔と親交。

１９３６（昭和11）年23歳。同大学卒業。前年より思想的に唯物論者となり、卒業論文で主任教授にしぼられたがパスする。

西口克己に於ける「我」の自覚史

その西口をして後年の革命家・西口に思想的に転轍した契機はなにか。１９３０（昭和5）年の「昭五三高ストライキ」と１９３３年の「京大滝川事件」と東大で連帯する学生運動を通じて、たしかに社会意識を深めてはゆくが、学生運動の活動家とまではいえない。その周辺に止まったカント的な観念論者にすぎなかった。彼をしていわしめれば、周囲の活動家の理論が「我思う、故に我あり」の西口の哲学を論破できなかったからとしている。しかし、それは「女郎屋の息子」という出自が、当時の良家の坊っちゃんたちの正義感に対する引け目であり、危険な理論と運動に触れるおびえでもあったろうことは想像に難くない。

自伝的小説『廓』の第二部での俊太の手記という虚構に託して西口は自らの精神的成長過程をつづっている。三高ストに対して、「生徒大会には賛成し、ストライキ決行には棄権」の態度だったが、「この事件こそは、今になって考えてみると、確かに日本軍国主義の戦争準備にたいする青年らしいひたむきの集団的な抵抗だったことは間違いない。そうであればこそふだんから理屈っぽく、納得の出来ぬことには随いてゆけぬ私までを何日かの共同行動にまきこんだ何ものかがそこにはあったのだ。が、再び正直にいってそれはあくまで私にとって一種の他動的な共同行動にすぎず、眠っていた私の魂を心の底から揺りうごかすような力とはならなかったのだった。」と書いている。

三高「昭五ストライキ」から「京大滝川事件」まで
―西海太郎（昭6文甲）の手記

その周辺の事情（まさに状況が意識を程度の違いはあれ規定する―引用者補注）を三高（文甲）で一級上から東大に進んだ西海太郎（にしみたろう・旧制明石中学卒、第三高校を経て1936年東京帝国大学文学部西洋史卒・中央大学名誉教授）の手記（旧制三高の同窓会誌『会報』1984年60号・1985年61号及び東大編集委員会の「わたしたちの滝川事件」1985年・新潮社刊）などを参照しながら、この時代状況における西口の〝暗い谷間の時代〟を測鉛する。

まず、三高「昭五スト」との出会いから。西海は以下のようにまとめている。「事の起りは、自由寮生が門限設定や入・退寮に関する学校側の管理制導入に反対し、それらの撤廃を寮総代から代表会議に議案として持ち込ませたことにある。動機はそうであるが、広く原因を考えると、それは、当時の生徒主事が時局に便乗して三高の伝統たる自由と生徒の自治を踏みにじろうとするに対する全校生の反発であった」とし、「約四五〇名が寮に籠城する未曾有のストライキは、七月九日、寮の周囲を警官が取り囲むなかで生徒側の敗北となっておわった」としている。ストライキ後の当局の処分は、二六名の除名、十五名の停学、約三五〇名の訓戒だったが、「その性質からいえば、このストライキは、私には、それから三年後に起こり、私がよく知っている滝川事件関係の東大の学生運動の先駆のように思われてならない」と記述している。

そして、「ストライキ後、三高は重苦しい閉塞的状況にあった。（一部略）学校警察のたぐいの生徒課が見張っている三高には、もはや自由はなかった。」1929年初頭のクラス写真には同級生三十三名であるのに翌年秋（昭五スト処分後―引用者補注）には、自発的退学やスト処分で約二十名に減っていたという。「しかし、多感で、無欲で、ざっくばらんな三高生時代にはぐくまれた友人関係は、東京にいって、かえって一層強められた」のだ。

謎の〝千駄木グループ〟

1931年春、西海太郎（19歳）は東大文学部西洋史学科に進む。間もなく東大病院の医師から肺浸潤と胃潰瘍と宣告され、初夏から休学した。姫高から京大経済学部に進んだ中学の先輩からの河上肇「第二貧乏物語」や山本宣治の訳書「戦争の生物学」などの読書をすすめられる。とくに原著者のゲオルグ・F・ニコライ博士が第一次世界大戦で軍医として従軍を拒否し禁固刑に処されるも支持者軍人の協力でデンマークに脱出した歴史的事実が今日のドイツや日本の歴史書で見落とされていることを指摘している。「西口克己（昭7文乙）は山本宣治の小説で詳しく書いてあるかもしれないが、自分はまだ（1986年時点）読んでいない」としていた。

（※西口はドイツの反戦主義者ニコライのことを小説「山宣」でとりあげていた。しかも、山宣の長女が片手片足の身体障害者として生まれた事件を契機に社会意識も深まり、自らの戦争反対の意思もニコライの到達点よりさらに進んで、「雲をつかむような頭の中だけの決意であってはならぬはずだ」と山宣の心理描写をしている。）

1932年3月下旬に西海は再上京し、東大に復学した。旧三高出身者数人の自主ゼミに三高文丙の先輩で東大の哲学科にいた伊藤充之を講師に「ドイツ＝イデオロギー」を学んだ。また、西海も史学専攻者を対象にマルクスのフランス三部作の「ブリュメール十八日」の原書の要約を説明したりした。1933年頃、西海の根津宮永町の下宿は、一時、藤本武（経済学部・赤色救援会のフラク担当）や土屋祝郎（「紅萌ゆる」岩波新書の著者）をまじえた三高出身者の碁会所のようになっていた。その後、駒込千駄木町の下宿に転居し、国史学科にいた北山茂夫（戦後日本史学において英雄時代論批判などで注目された立命館大学法学部教授）を中心とする、いわゆる〝三高千駄木グループ〟への仲間入りをした。

このグループは、「講座派マルクス主義」の羽仁五郎の影響下にあり、「東洋に於ける資本主義の形成」（「史学雑誌・1932年刊」）を読まない者はいなかった。西海自身は「社会主義の理想をおうことよりも、それよりさきに、まず、徴兵をもって青年を脅かし，イタリアやドイツに見られるように自由と人権を圧殺する，ファッショ的な軍国体制が強化されていくのに対して青年は抵抗すべきある」と思うようになっていた。「いつしか、共産青年同盟（略称、共青）につながるプロレタリア科学同盟の東大班に属し、東洋史学科の先輩鈴木朝英（後の北大教授）から渡される独文の『国際新聞通信（インプレコール）』を翻訳し、必要な記事を東大「共青」の機関紙「赤門戦士」などに流す仕事をしていた。

それゆえ、ヒトラー政権成立の事情やその後の欧州の情況を、一般の学生よりも詳しく知っているつもりでいた西海が1933年5月26日、赤化教授として滝川幸辰教授を休職処分とする「京大滝川事件」に遭遇するのである。三高出身者が多くいる京大から出身高校別のオルグが東大などに連帯行動を求めてきた。西海は燃えた。西海は京大の出身高校別オルグにこたえる「高代会議」に協力し、図書館の屋上から下に派手にビラを撒くなどした。ほとんどすべての同級生や友人から、カンパとして闘争資金を集めた。

1933年5月30日本郷の森永製菓2階の喫茶室で旧制三高出身者が新入生歓迎会を開いたが、喫茶店から本富士署に〝無届け集会〟として通報され、文学部三高同窓会の会場から西海太郎、津吉英男（西洋史・引用者補注―『廓』第二部第二章に出てくる西口の旧友津好三郎という京都の酒造家の息子で高等学校の一級先輩の地下の左翼運動にかかわる学生のモデルか）が検挙された。（この辺の事情は田宮虎彦が『抵抗の学窓生活』要

書房刊・１９５１年所収の〝滝川事件から二・二六まで〟を書いている。）

またこの時、千駄木グループの西海の下宿が「赤門戦士」の印刷場所になっていて、共青の唯一の財産「謄写版」の回収に失敗して逮捕者もでた。西海自身は、政治的行動には不向きであるが、せめて人権擁護と自由な批判的精神だけは堅持したいと思い続けていた。

最後の反戦・反ファッショ運動

文学部学生大会は6月17日に、４００人近く入る29番教室で出隆の「西洋哲学史概説」の講義時間を割いてもらって実施された。そして、6月21日の歴史的な法文経三学部連合学生大会にまで一挙に燃え上がった。当時、東大には50人近くの共青と1人の学生党員だったが、6月21日の法文経合同学生大会の会場内外に全学８２６９人の学生の半数が、滝川教授の復職を求め大学構内を埋め尽くした。それは戦前の最後の反戦・反ファッショの学生運動だった。１９３５年の美濃部達吉の「天皇機関説」が国体に背く学説として排撃にあったときには、京大滝川事件に際して法学部教授の総辞職と学生大会が呼応したような反撃をおこす運動の力はもはや東大にはなかった。

１９３７年4月、日本放送協会に就職していた西海の処に、「京都から昭９文丙卒の故市村恵吾が上京し、先輩の新村猛その他の編集・発行する雑誌『世界文化』を二、三冊持参し、購読を勧めたので、私の日記によれば、五月十七日に半年分の雑誌代を前納して固定読者となった。しかし、七月に本格的な日中戦争が始まり、欧州の人民戦線運動を伝えたこの雑誌も十一月に廃刊となった」と書き残している。１９３３年5月の京大滝川事件に連帯した東大での学生運動の中でも、西口克己が主体的にうごいた痕跡はない。

小説『廓』第二部第３章では、西口克己をモデルとする警察に逮捕された俊太について、父親貫太にこう語らせている。「が、しかし、貫太は父親らしい鋭い勘で、息子の性格を見抜いてもいた―頭のよしあしは別として、あんな肝っ玉の小さい、神経質でわがままな、おまけに無類の不精者が、それこそ捕まったら最後、拷問で殺されるのを覚悟の上で、あの大それた左翼運動とやらに加わるだろうか―ふン、とてもそんな度胸はあるまい。あいつはそれをじぶんで知っていたからこそ、どっちつかずのやけ酒を飲んでまごまごしてやっがンだ。」

そして、俊太のした「犯罪事実」とは、地下の赤化組織に対する金銭を出したらしいという程度のことだったのだ。無論、カンパだけでも治安維持法では「結社ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲナシタル者」（目遂行為）に相当するが、俊太は金を貸したが、使途は友人の滞納した下宿代のためといいきり、特高の追及をかわそうとした。左翼運動に荷担することが怖くて、使い途をあえてきかなかっただけと述懐させてはいるが。

しかし、１９３３年5月から卒業の１９３６年3月までの間に、西口はドイツ観念論批判を卒論のテーマとする。しかも、学生運動の活動家や心情的左翼学生が「生活の探求」派のように蛸壺にこもり始めたとき指導教官に隠れてマルクス主義の原書から研究ノートを取り始めたのだった。

西口の精神的な成長に於ける過程矛盾を小説『廓』の俊太にそくして語らせると―。〝女郎屋の息子という卑下感（オモリ）〟と秀才教育で飛び級進学をつづけた〝優越感（バネ）〟の対立だった。「ときとして私は級友の誰もがなし得ないような無茶な真似をして教師にさからったりする少年でもあったのだ。たとえこの無茶な真似が私の心の底ふかく巣食っていた卑下感をかくすための裏返し」という外的表現だった。

１９３３年以降、総体としての学生運動が崩壊するなかで、学生の関心が後退しつつも禁断の木の実の香りを放つ「唯物論研究会」に関心を高めていった。アドラツキイ版「ドイツイデオロギー」（唯物論研究会・森宏一訳昭和11年1月ナウカ社刊）やカール・マルクス学位論文「デモクリットとエピクロスの自然哲学の差異」などがのったマル・エン全集第一巻（１９２８年・改造社刊）などが、下宿から実家に隠したのか、西口の書架に残っていた。また、岩波書店の「思想―89号」（特輯　弁証法研究）の本多謙三「現象学と弁証法」（１９２９年9月）論文の結論「彼（マルクーゼ：引用者補注）は、そして我々は解釈的現象学の万能を信じようとするのか、それともマルクス主義の方法と哲学を鮮明にしようとするのか。もし前者であるならば現実の世界に降りてくる要も資格もない。もし後者ならば、ハイデッカーを以てマルクスを発展させ補足することは危険である。（一部略、レーニンの「唯物論と経験批判論」の引用）吾々は何れかに態度を決せねばならぬ。かつて無前提と立場の排除とを標榜した哲学はかくして党派的性格をあらわにせねばならぬ。」と迫られ、あえて卒論に唯物論を選択した。したがって、〝卒業即失業〟の法則がまっている。たとえば、西海では就職の目途が立たず大学院に、井上正蔵（ドイツ文学のハイネ研究、東京都立大名誉教授）も大学院にはいり東京市知識階級失業者救済の翻訳の仕事をする時代だったのだ。父親の縁故による労働科学研究所への入所で「労働科学」の編集スタッフから

東大文学部三高同窓会員

正職員への途は上出来だった。

労働科学研究所入所と生産力理論のパプテスマ（洗礼）

倉敷から東京に移ってきた新生「労働科学研究所」に１９３６年４月の「卒業即失業」を脱して西口は１９３６年10月に正式に入所。「労働科学研究所」の正統派である医学系や経済学系でない「隠れマルクシスト」西口は異端派的存在であったことにはかわりない。逆にこれが契機となり、戦後の転換につながった。「跳べ！ここがロドス島だ」とステップをせかされながら尻込みし、実践をためらう臆病な自分にいやけがさし、そのくせ自分に甘えていとおしむもう1人の自分に辟易する、若きインテリゲンチャが、たどった「コペルニクス的転回」への長い道程でもあった。

所長命令で西口は「佐藤信淵の研究」「プラトンの国家論」「二宮尊徳の篤農思想」などの論文を執筆するが、いずれも、『没』だった。絶筆となった『赤旗』日曜版連載の「戦争狂想曲」では仁科寛平（西口克己本人がモデル）は「もし寛平が良心を捨てて、これらの論文を右翼ふうに書き、それがそのころの『権威ある』雑誌にでも発表されれば、戦後の寛平はみじめであったろう。だが論文はすべて『没』になり、所長はそのつど苦い顔で寛平をしかった」と記述している。つまり、『没』になったということは、思想的な「転向」にからめとられることにならなかったといっている。では、なぜ暉峻所長は『没』にしたのか。たとえば、「佐藤信淵の研究」で１９２９年11月に岩波書店からでた羽仁五郎の「佐藤信淵に関する基礎的な研究」を下敷きにした西口論文は、羽仁が佐藤信淵の封建制批判の口を借りて当時の資本家と寄生地主のブロック権力批判を忍ばせる手法を踏襲したからであろう。東大時代の千駄木グループの羽仁教信者に感染したことがここでいきたのではないか。

過去のマイナスは未来のプラスで克服

暉峻義等追悼集の『追憶』には、「青山時代（１９３７年～１９３９年12月頃まで東京の青山師範学校跡地―引用者補注）は単に特高だったが、産報時代（１９４１年４月以降、１９４５年９月まで）は憲兵との対応が絶え間なかった。風早（社会政策学者の風早八十二）所員の検挙（―引用者補注：１９３９年労研入所後40年７月検挙）をきっかけに数名の所員を検束、『暉峻先生が風早をそんなにまでかばうなら、われわれとしてもっと厳しい態度で対処する』といった調子の警視庁課長の言葉を今でも私はわすれられない」と潮見実が書いていた。憲兵にも警視庁にも暉峻はぶれなかった。かばい続ける、それどころか所員としてきちんと処遇する、その暉峻にしかられたぐらいでいじけてはいない。西口は西口らしくいくことにきめる。西口は労働科学研究所の勤労文化研究室に所属し、医学や心理学の研究室の仲間に加わり、常磐炭坑や三池炭坑の深い地底にもぐったり、大井に日本光学などで若い女子労働者にまじってレンズ磨きをするなど、現場での調査をつづけた。

西口の死後、のぞみ未亡人をかこんで東京で「じゃじゃの会」（名前の由来は西口の綽名であろう）が年一回ひらかれていたが、参加者は永井智雄（俳優座）など演劇関係者、藤本武（三高・東大・労研）と儀我壮一郎（東大経済学部大河内ゼミ１９４３年卒。大阪市立大名誉教授・戦後共産党京都府委員会事務局長・伏見在住）などであったが、見えないつながりは東大経済学部大河内一男氏や労研の風早八十二などの〝生産力理論〟だったかもしれない。

治安維持法逮捕の前歴者（滝川事件における東大当時経済学部の高代会議委員・共青フラクション）だった藤本武の「把頭炊事の研究」（大阪屋号書店・１９４３刊）の目的は、中国大陸の日本軍占領地にある炭鉱の任務として、大東亜戦争を勝利におわらしめるための増産要求と日本人と中国人が英米撃滅に協力して民族共栄する拠点つくりであるとしている。その目的のために労働力をどこまでこきつかえるか、労働力維持の食生活のぎりぎりの合理化方法などに関して研究する。戦時中の日本占領地での炭坑鉱山における飯場で共同炊事代が労賃からピンハネされる中間搾取となっているが、一挙になくすと親分である把頭による労働請負制も崩れ、石炭の産出に影響するという現実を現実として受け止める〝生産力〟理論でもあった。そうした総体としての労研で、現場の良心は西口においては、毒舌でカタルシスしていた。特高に狙われない程度に警戒して―。

「勤労青少年読書意欲」の調査

１９４３（昭和18）年３月、労働科学研究所は労働科学叢書の第一冊を出版した。「決戦体制下の生産力増強の完遂は、（略）一に勤労するわが青少年諸君の双肩にかかっている」とし、「わが青少年の生命力の生々たる発展こそ、戦時生産増強の動力」と、暉峻所長は序文をかいている。その「第二編青少年の勤労生活感」は、「第二章　経歴、職業観について（河野公平）第三章　賃金観について（藤本武）」である。「第六章　読書について（西口克己）」となっている。

調査の対象は、十六工場における青年学校の生徒で、一年生五八七名、三年生五二八名、五年生一一三名、計一二二八名である。

（1）の読書意欲についての、「なお、読書意欲とはいわゆる読書に対する『志』の謂であり、現実的な読書状態とは一応区別されるべきある。というのは旺んな読書意欲の存在は、必ずしも旺んな読書状態の存在を意味しない。このことは、彼等が他ならぬ勤労青少年として、経済的・時間的に一般青少年に比して余裕を持たぬこと、肉体的疲労をも考慮され

るからである。しかし、かれらの（1）、自発的意志に基づくものでなく、（2）戦時生産力拡充のためのまことにやむをえないものであることを認識すべきである。」と労研の生産力保全の理論どおりに指摘している。

（2）の読書対象については、全体として、娯楽雑誌が最も多く読まれ、自然科学的・技術的な雑誌は前者の約半数より読まれていない。また、「所謂団体的雑誌（補注：戦争協力団体の雑誌）は一般青少年よりもかなり多く読んでいるようである」が、「彼等が自費で買って読むのではなく、青年学校寄宿舎備え付けものを読む」と推測している。「したがって、いかなる雑誌を備え付けるべきか、と言う点に指導の余地が多分に残されているわけである」と産業報國会向けの意見を付しているが、西口の真意は、「たとえば、愚劣な舎監がいて、自分の好む講談類を備え付ければ、青年も必然的にそれを読む結果」となると、決戦態勢の実態を皮肉るのである。

（3）の読書指導についてでは、（B）ケースの職工寄宿舎の舎監は、子ども達は遊びたい盛りで暇と金さえあれば疲労などふっとばして遊びたがるから、疲れているからといって放任しておくことが本人達のためによくないと言い放ち、「暇さえあればがんばってためになる本を読め」とすすめていると調査員西口に模範的なところを見せる。しかし、工場の現場調査の「まねかねざる客」たる西口は、「或夜、同氏が自室で仰向けに寝転んで夢中になって『講談倶楽部』を読んでいるのを目撃して妙な気持になったのである」と記述する。けっして批判ではない、あくまでも調査員個人の「妙な気持」であると逃げ道をつけながら、決戦態勢なるものの『欺瞞性』、あるいは『破綻の現場』を報告する。

寄宿舎生活の勤労青少年が娯楽雑誌を多く読むのは、疲労と時間的余裕の欠乏にもよるとしつつ、「彼等の知的水準の低さを観るよりも、所謂うるおいを欲し、夢を追うているという心情をも充分洞察してやるべきである」と読書指導者に留意を求めている。

そして、（4）の総括として、読書意欲の確認、読書指導者の資質の確立、勤労青少年向けの勤労図書群選定という三つのモメントが有機的に結合すれば、「戦時下に於ける勤労青少年の読書は、必ずや現在以上の明るい飛躍をとげるであろうことを確信するものである」と実態調査の委託先に対する模範回答をのべている。しかし、それでもいわゆる「戦争協力」になりえるわけだが、アンケートの生データ「付表」を1から12までを絵解きすれば、言外に勤労青少年の別の実態も浮かび上がる仕掛けになっていた。

たとえば、三年生を対象にした質問項目で〝もっとお金をかけたいもの〟として、トップは無記入で次が図書代になっている。〝節約出来ると思うもの〟として、映画などの鑑賞や衣服身の回り品やその他小遣いなどが、二桁の回答となっているが、貯金国債はゼロである。貯金国債は戦費調達用であるから、削りますといえば非国民のレッテルを貼られかねないと警戒の心理がはたらいているか、有無をいわせぬ天引きであきらめているかのどちらかだろう。そう推測するのは、無記入が三桁あり、アンケートそのものを思想調査に類するものとして疑っていたのだろう。

極めつけは、〝自分の仕事場は健康に悪いと答えたもの〟は〝よいとこたえたもの〟の2倍であり、さらに無記入は悪いと答えた者の2倍である。「生産力理論」は労働力の再生産のためにその保全を求めるものであるが、聞こえてくるのは「もうこれ以上はムリ」の声ではないか。こうした労働の現場をフィールドワークすることで、西口の頭の中の唯物論は「実践的唯物論者」の立場への質的転換を射程にいれていった。

「量から質の転換の弁証法」

戦後、1940年代末頃の「社会政策」の本質論論争について、大河内一男東大経済学部教授は、「社会政策四十年　追憶と意見」（東京大学出版会・1970年刊）で「昭和二四年以降、いわゆる社会政策論争なり社会政策の本質論争なりが世情を賑わしましたが、私はあまりそれに興味を持ち得なかったのは、戦前の事態をまるで知らない人が、戦前に苦労してつくり上げた理論を、戦後の雰囲気におされて勝手気ままに批判して格好よがっているのが私には気に入らなかったのです」（P246）と述懐している。転向意識はまったくない。しかし、風早八十二の労働科学的な労働力再生産論も戦局の悪化に伴い、労働力を再生産するための生計費を「決戦生計費」にまで切り詰めを指導するまでに変貌した現場に居合わせた西口にすれば、総資本の合目的的な労働力の保全を期待する立場から、労働者の組合運動など階級闘争で力関係をかえるいわゆる「生産関係理論」の立場への移行が公然化したのではないか。

ようするに、西口克己一流の「過去のマイナスは未来のプラスで克服する、これが西口の弁証法的自己批判」だった。国家総動員体制の一翼をになった大日本産業報國会に参加させられた労働科学研究所、その労研が請け負った企画院の基礎調査などの統計処理の仕事や勤労青少年の働く現場調査など戦争協力のマイナスを戦後入党し常任活動家になることで戦争反対のプラスを積む、戦時中に密かに紡いできた反戦の意思が「命がけの飛躍」をとげたのだ。そして、同じことだが、女郎からの搾取で大学に進んだ負い目を、戦後の売春防止法制定時に「女郎屋を学生下宿」に転換し、売春婦を廃娼運動の対象としてだけではなく生活基盤づくりと女性としての自立に協働したのである。西口の女郎屋に最後まで残っていた女性の行く末を面倒見ただけでない。女郎屋の息子と女郎だった女性のスティグマ（聖痕）を共に「罪滅ぼし」という分かり易い言葉で語ったのである。これもそれも「量から質の転換の弁証法」をそのまま生きた西口克己だった。

「京大反戦平和詩集」のことども（3）

小畑 哲雄

独房の中の思いを「詩」に

「京大反戦平和詩集」が、いつまで、何号まで、発行されたのか、正確な記録も記憶も、私の手元にはない。一九五一年十一月十二日の、いわゆる「天皇事件」の起こった日に発行された「天皇問題特集号」のあと、私が書いた詩で残っているのは、拘置所の独房の中の思いを「詩」にしたものだけである。

「天皇事件」は、国の内外に報道されたこともあって、大学当局によって、解散を命じられた同学会、そしてその同学会の「役員」であることだけを理由にして「無期停学処分」を受けることになった八名の学生に、文字どおり国の内外から、「激励」の手紙をいただいた（「脅迫」めいた手紙もあったが、これらはすべて無視した）。激励の手紙に、私が代表してお礼の手紙を書くことになった。折り返し、大分で高校の事務職員をしながら、「わだつみ会」の活動をしている女性から「返事」が来た。そこから始まった「文通」の過程で、「反戦平和詩集」を送り、批評を求めているが、あたらしい「詩集」のことは全く出てこない。「文学」について書いているのは、そのころ読みふけっていたロシア文学の作品のこと、それと、これから書こうとしている「小説」の構想などばかりである。（これはまったくの余談であるが、その文通の相手がのちに私の妻となるのであった）。

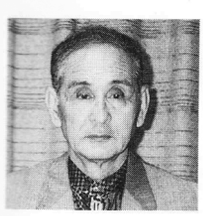
「京大反戦詩グループ」の名も、「京大文学サークル」となっていった。山崎正和を編集責任者として「花の輪」という雑誌を出したのは、一九五三年か五四年のことであった。

京大を去って大阪で教職についていた私が、仲間であったB君の結婚式で歌われる歌の作詞をしたのが、「炉に火は燃える」というものであり、これが最後の「詩」作品となった。この結婚式は、相手が「京都女子大」の学生であり、阿部知二氏によって小説化され、「女の園」という映画にもなったので当時世間の話題となったものである。

私の作品から――

前書きはここまでにして、「京大反戦平和詩集」に載せた私の作品二つを次に紹介して責めを果たすことにしたい。

まずは「原爆展」にかかわるものである。広島、長崎に出かけた仲間たちが持って帰ったものの中に、その写真はあった。



一葉の写真に
その時、
女学校の一年生だったという
その人の顔は、
ピカドンと共に失われてしまった青春を
悲しく物語っている。

左の眼は
異様にみひらかれ、
一瞬にして
ひきつってしまい、
凝固してしまった筋肉には
あの暗い谷間の日々に
私たちすべての上にただよっていた
思考力の喪失が
そのまま刻みこまれてのこっている。

上唇はめくれかえり
そして
頬からのどへかけての
生々しいケロイド、
このケロイドは
どのような整形手術も
それを消すことが出来ないという。

ちょうど
ヒロシマの土地に
表面だけはきれいになっているけれど、
生々しく今ものこっているやけあとのように、
まったく手の施しようもない戦争の傷あとを
物語っている。

一葉のポートレートに
生々しくただよう原爆のにおい、
そして救いがたい戦争の悲劇、
その悲劇を
せめて
もう一度くりかえすことだけは
許してはならぬ、
どのような事があっても
そのような悲劇を
再びくりかえしてはならぬ。
どのようなことがあっても、
どのようなことがあっても。

「天皇事件」前日に逮捕されて

「天皇事件」の前々日、私は、「暴力行為等処罰に関する法律違反」容疑で、京都市警に逮捕され、事件現場にはいなかった。しかし、大学によって解散を命じられた同学会の役員として処分された。私は、拘置所の独房で、「捜検」で回ってきた看守からそのことを聞き、「処分」が「無期停学」であるということは、担当の検事から聞き出した。処分の理由は、「起訴猶予」となり、解放されて下宿に帰ってはじめてわかった。京大から父宛ての文書が回送されてきていた。そこには、「本学行幸に際しておこった事件において」小畑哲雄君には「学生の本分に反する行為があったので左記のとおり懲戒する」旨が書かれていた。

翌日、京大に行き、補導部長、学生課長にその文書を見せて、「あの日、私は中立売署の留置場にいた、これほど確実なアリバイはない、私が当日何をしたというのか、説明してくれ」と詰め寄ったが、二人は「小畑君には気の毒なことをした」と繰り返すだけであった。次の詩は、看守から「同学会解散・役員の処分」を聞きだしたときの思いを回想したものである。拘置所では本の持ち込みは許可されたが、「筆記具」は原則禁止であった。

【連載】

この1枚

1961年1月

共産党の赤旗びらき

毎年京都会館第一ホール埋めて

最近は「党旗びらき」と呼ばれているようだが、かつては毎年新年に共産党府委員会主催の「赤旗びらき」が行われていた。写真は45年前、1961年の「赤旗びらき」（京都会館第一ホール）。「平和は戦争に勝つ」「輝かしい解放の夜明けのために第8回党大会へ前進しよう」のスローガンが掲げられている。壇上には各労組・民主団体の旗が林立、躍進する民青同盟員たちが舞台に並んだ。60年安保闘争の高揚を受け、綱領を決める第8回党大会の成功へむけて2000人が会場を埋めた。

ちなみに翌62年の赤旗びらきには蜷川知事も駆けつけ京都市長選で共・社・地評が統一して加賀田進氏（社会党前代議士）を推して闘うことを喜び激励した。

花

足が冷えるせいもあったろう
二〇燭の電燈がまぶしくもあった
しかし、何よりも
はげしい感情のたかまりが
私をねむらせなかった

私の胸の中に、一すじ
深い悲しみの思いが走り去る
新聞に私の名を見たという
年老いた父母の悲しみが
私の身体をふるわせて
一夜まんじりともさせなかった。

一坪半の部屋
あついコンクリートの壁
鉄棒のはいった窓
のぞき窓のついた扉
そして、部屋の中いっぱいにたちこめた
異様なにおい
自由をうばわれた私は
その夜
そのすべてに
私の前に高くそびえたった
権力というものを
感じとらねばならなかった
いきどおりと悲しみが
いつか新しい闘いへの
そのためには
私のすべてをすてねばならない
あたらしい闘いへの
決意となって
誓いとなって
コンクリートの壁をもつらぬきとおす
巨大な火柱となったとき
窓の鉄棒のかなたは
ほのかに白んでいた

二〇燭の電燈の下に
差入れの花が
私を見守るかのように
すき間からもる風に
かすかに震えていた

（完）

会員消息

私が生まれた年の父のこと

嬉野京子（川崎市）

前略　私は嬉野満洲雄（前号「発掘戦後70年」に掲載）の二女でございます。

このたび渡辺（和代）より「燎原」が送られてまいりました。１９４６年は私が生まれました年です。父からこのころの事はほとんど聞いておりませんのでたいへん興味深く読ませて頂きました．お書きいただきまして感謝いたします。ほんとうにありがとうございます。

本箱をさがしましたら今にもくずれそうな一冊が出てまいりました。時代を実感しております。

細井師の人柄を知る

矢吹正夫（下京区）

私は１９７０年初めて京都に来ましたが、細井友晋さんのお名前は、当時の新聞で知ってはいました。残念ながら直接お話を拝聴したことも、面識もありませんでした。今回高橋先生のお話を拝聴して、細井友晋先生の活動やお人柄を知ることができました。

紹介のあった細井友晋先生追悼集である『そのねがい　わが心に生きて』を是非とも読んでみたいと思いました。

永く続くことを念願

芦田丈司（福知山市）

「燎原」に拙文を掲載していただきありがとうございました。すぐれた活動記録や格調ある研究成果を載せておられる当誌にはふさわしいものでなかったと反省しています。岩崎革也研究会の現状を報告させていただいた程度のものとご理解いただければと思います。

内容豊かな「燎原」を隔月とはいえ継続発行されるのはたいへんなことと推察しております。永く続くことを念願しています。

入会

矢野美彦（乙訓郡大山崎町）

京都の民主運動史を語る会２月例会

と　き　**２月20日**（土）　午後２時～４時30分

ところ　**京都市職員会館かもがわ 第１会議室**
河原町竹屋町東入、石長旅館の奥

テーマ　**京大天皇事件前後の学生運動**

語る人　**今西 一さん**（小樽商科大学名誉教授）

1948年京都市生まれ。立命館大学文学研究科修士課程修了で農学博士（京大）。小樽商科大学名誉教授・大阪大学招聘教授。『近代日本成立期の民衆運動』『文明開化と差別』等の著作多数。学生運動の当事者への精力的な聞き取りも続けておられ、戦後の学生運動についての歴史的な考察を通じて見えてくる京大天皇事件前後の京都の学生運動について語って頂く。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。
会員外の方は資料代３００円。

情報スクラップ

『〝棄民〟のあしあと』 夏梅誠一さんが出版

元・京都大有社社長の夏梅誠一さん（94歳）が『〝棄民〟のあしあと』を上梓され12月８日に出版記念会がルビノ堀川で開かれた。２００１年から14年間もエッセイ誌『飛翔』に連載されていた。１９４２年、ソ連、満洲国境守備隊要員として派遣され、45年９月、俘虜として収容所へ連行、酷寒下の強制労働で多くの戦友たちが倒れ、凍土の下に。「国籍も離脱し、事実上〝棄民〟とされた」その〝あしあと〟を生残った一人として書き残すことを、せめてもの餞としたい―という思いが伝わる一冊。（A５判１７４頁、かもがわ出版編集・私家版）

映サ１月例会は「戦場ぬ止み」

京都映画サークル協議会の１月例会は「戦場ぬ止み（いくさばぬとぅどぅみ）」。「標的の村」の三上智恵監督の作品。辺野古で何が起こっているのかを記録する。今回は特別例会で、会員以外の方も鑑賞できる。上映協力券１２００円。日程は１月17日（日）11時／13時30分

１月18日（月）14時／19時。18日14時からの上映後、上鳥羽教会牧師の月下星志さんの辺野古報告がある。

◆催し案内

語り始めた「駅の子」たち　２月14日（日）午前10時～12時、京都市職員会館かもがわ。小倉勇さん、本庄豊氏（立命館宇治中・高教諭）が戦災孤児たちの体験と思いを語る。参加無料。（平和遺族会など主催）

京都社会労働問題研究所講座　２月29日（月）午後６時、アークホテル（四条大宮西）。吉田美喜夫立命大総長が「憲法・法律・立憲主義」と題して講演。

バイバイ原発３・12きょうと　３月12日（土）13時30分～円山野外音楽堂。秋山豊寛さん（宇宙飛行士）ほか。雨天決行。実行委員会主催。

岡本康さんを偲ぶ会　３月21日（休）午後２時、コープイン京都。

編集後記

訂正　前号８頁３段目「７００万円」は「７００円」（公債の当時の時価の意）、９頁１段目「抽出」は「描出」、同４段目「縮刷版」は「縮約版」の誤植でした。

▼元日の夜、ようやく編集が終わり、日本酒「九条」（佐々木酒造）を味わいながらこれを書いている。近刊『憲法と京都―京都の15人が憲法を語り行動する』（かもがわ出版）には蜷川府政時代の「ポケット憲法」にも見られる京都における憲法水脈が綴られているが、日本酒「九条」もすっかり定着してきた。本に執筆している本田久美子さん（京都市長選候補者）さんもその水脈の一人、ぜひ「憲法市長」を実現したいものだ。（湯浅）

’16

明けましておめでとうございます

元旦

京都教職員組合
執行委員長　川口隆洋
京都市左京区聖護院川原町 4-13　京都府教育会館内
☎075-752-0011　FAX075-751-1091

京都市職員労働組合
中央執行委員長　小林竜雄
〒604-8571　京都市中京区河原町御地
電話 075-222-3883　　FAX075-222-3893

公益社団法人 部落問題研究所
〒606-8691　京都市左京区高野西開町 34-11
☎075-721-6108　FAX075-701-2723

京都民主医療機関連合会
〒615-0004　京都市右京区西院下花田町 21-3
春日ビル４Ｆ

京都民医連中央病院
〒604-8453　京都市中京区西ノ京春日町 16-1
☎075（822）2777
http://kyoto-min-iren-c-hp.jp/

公益社団法人　信　和　会
京都民医連第二中央病院
京都市左京区田中飛鳥井町 89
☎075-701-6111
URLhttp://park12.wakwak.com/~kyoto2hp/

図書出版　文理閣
〒600-8146　京都市下京区七条河原町西南角
TEL075（351）7553　FAX075（351）7560

京都自治体労働組合総連合
執行委員長 池田　豊
京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラボール京都 5F
〒604-8854 電話 075-801-8186 FAX075-801-3482

福祉保育労働組合京都地方本部
執行委員長　前田鉄雄
京都市上京区猪熊通丸太町下ル中之町 519
京都社会福祉会館内
☎075-813-4800　FAX075-822-6220

日本国民救援会京都府本部
京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラボール京都５階
〒604-8854　電話 075-801-3915　FAX075-822-6632

宇治山宣会
会長　藪田秀雄
〒611-0033 宇治市大久保町北の山 11-1 藪田秀雄気付
TEL0774-48-2472

市民共同法律事務所
京都市中京区鳥丸通二条下ル西側ヒロセビル２階
TEL075（256）3320

京都第一法律事務所
京都市中京区鳥丸通二条上る蒔絵屋町 280 番地
ヤサカ烏丸御所南ビル４階
TEL（075）211-4411
FAX（075）255-2507

弁護士 秋山健司　弁護士 大河原壽貴　弁護士 寺本憲治
弁護士 浅野則明　弁護士 大島麻子　弁護士 藤井　豊
弁護士 荒川英幸　弁護士 奥村一彦　弁護士 藤澤眞美
弁護士 飯田　昭　弁護士 尾崎彰俊　弁護士 村山　晃
弁護士 糸瀬美保　弁護士 高木野衣　弁護士 森川　明
弁護士 岩橋多恵　弁護士 谷　文彰　弁護士 渡辺輝人

知は力、本のことならおまかせください。

民主的出版社15社との共同で、2～3日で本をお届けする「本の特送便」をご利用ください。詳しくは下記までお問い合わせください。

ブックセンター **かもがわ**
☎075（415）7902
FAX（415）7900

今年も話題の本をお届けします

株式会社 **かもがわ出版**
☎075（432）2868
FAX（432）2869

心に伝わる本づくり、自費出版の相談は

株式会社 **ウインかもがわ**
☎075（432）3455
FAX（432）2869